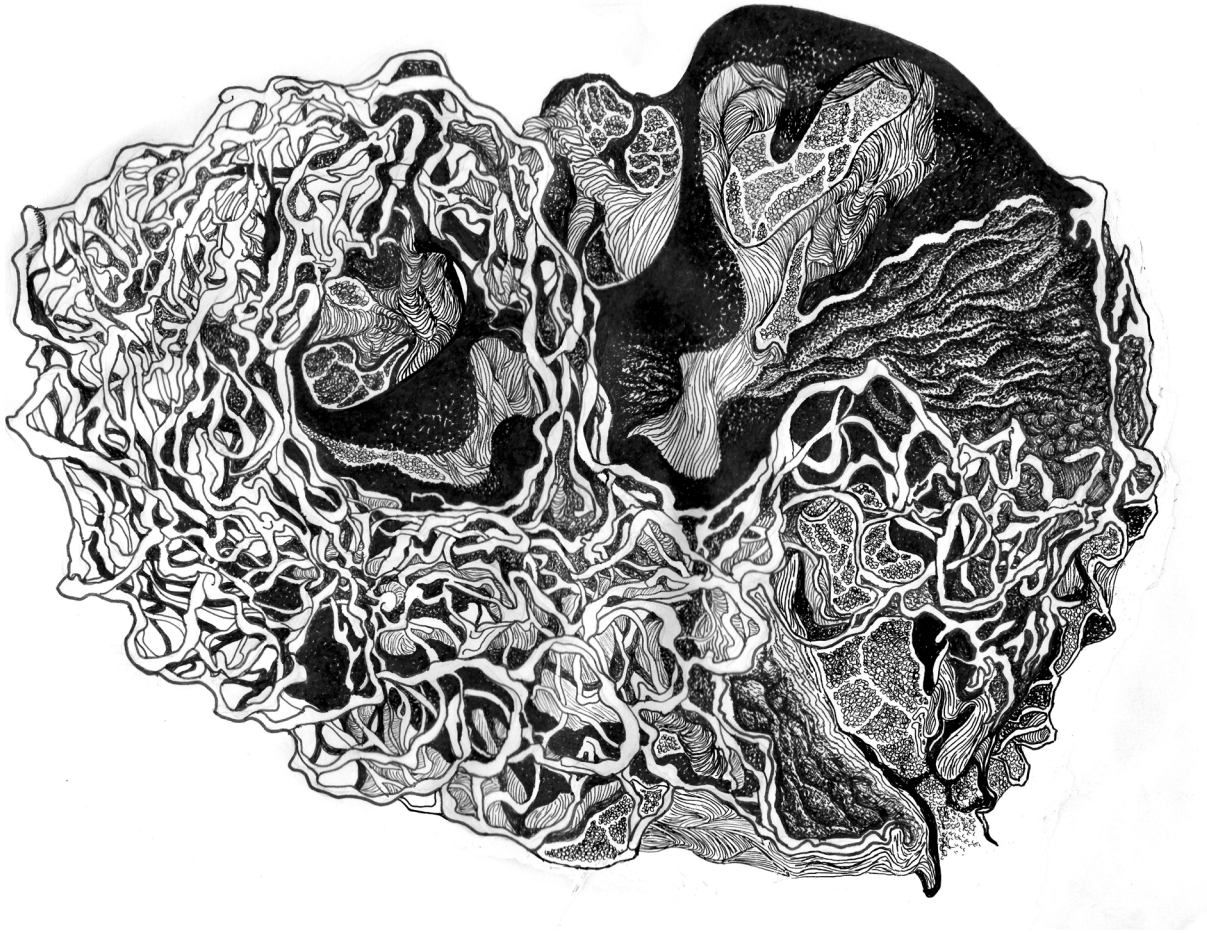
KSKQ
イマージュ
2017年3月

1991年9月3日 第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行



都会の収容施設から
太古の海の記憶へと。

まもなく、開幕

ニライカナイ
命の分水嶺

劇団態変『ニライカナイ - 命の分水嶺』

3/24（金）19:30
3/25（土）13:00 / 18:30
3/26（日）13:00

会場　HEP HALL（大阪市北区）

風、ニライカナイ

金満里

遠くに　近くに　深くて浅い
万物に　生命与え　生まれる根源の
海

苦しみ　慟哭する　怒りの炎
ゆらゆらと　メラメラと　立ち上がる
大地

我らは　その両方に　跨り　未来を見据えてきた

ある時は　大地を叩き　宇宙天の蓋を
開けようと

ある時は　生贄を　大海に捧げ

どれも　穹窿の反転　を期待し

細くて赤い糸　を垂らし　占うように

だが、大地から　つながる海　があることを
初めて知った　遥か　向こうの　白波漂う
その向こう

分けては　つながる　大宇宙の　一角のような
吹いてくる　風に乗って
見えてくる　あの人たち

さぁ、迎えるときが　きた

『ニライカナイ-命の分水嶺』公演に向かう

下村雅哉（パフォーマー）

「ニライカナイ」はこれまでの劇団態変の作品より、観た方に直接的に感じてもらうことが多い作品になると思います。

障碍者にとっての日常は、健常者にとっての非日常にもなります。例えば、普通は高校を卒業したら大学に行くか、就職するかの「選択」ですが、私自身は、学校に通う間はいる場所があるけど、そこを出て行ったら、身を置く場所がないという感覚を強く持っていました。この作品は障碍者の日常と健常者の非日常が重なりあって出来上がっている気がします。

相模原殺傷事件のような事が現実に起こる世界になっている現在ですが、皆がそれをあるものだと思っている訳ではなく、むしろ自分をそこから解放できることを求めているはず、という思いでこの公演に取り組んでいます。

渡辺綾乃（パフォーマーインターン）

劇団態変の公演は2015年の「ぬえ」で初めて観ました。作品は分かるところと分からないところ、両方ありましたが、パフォーマーが舞台上で「無」で自分の表現をしている所に心をひかれました。「無」というのは、舞台上で台詞も役柄の説明もなくて、身体で表現をするということ、でしょうか。自分を見せられる場所、人前に出て自分の表現をする場所があるなら、やってみたいと思い、参加を決めました。

今、稽古場ではやっと動きが理解できたところなので、ここから自分がどう表現するのかが問われるなと思いながら、作品に向かっています。

小林加世子（パフォーマー）

私は昨年3月、一度も観た事がなかった劇団態変の「ルンタ」東京公演にエキストラとして初めて参加しました。

それまで人前で身体表現をした事はなかったのですが、健常者の中で生きてきて、共通認識として「これはできるよね?」と思っていたことが、態変では、皆、できる事も動きも違っており、自分の価値観や身体感覚が揺さぶられるのを感じました。

それ以来、東京から（金満里の）身体研究所に通って、アトリエ公演「ヴォイツェク」で初めてパフォーマー出演を経験しました。

普段は人前に出るのはイヤだなという思いもどこかにありながら、表現を楽しんでいる自分がある気がします。

私も新人ではあるのですが、今回の稽古場にはパフォーマーインターン（註／研究生）の方も加わり、自分でも思ったことを言葉で伝えたりしながら、稽古にのぞんでいます。

廣川景亮（パフォーマーインターン）

劇団態変に参加したのは、パフォーマーの小泉さんにとある音楽祭で出会い「劇団に興味ない?」と声をかけてもらったのがきっかけでした。

正直なところ、これまで芸術の分野は苦手な方で、劇団の活動などもちろん、したこともなかったので、障碍をもつ以前なら興味がわかなかったかもしれません。

今は、できることを増やして何でもやってみようと思っているので、稽古場でも自分の動きを「こういう感じなんや」と納得しながら、好奇心をもってやっています。

『ニライカナイ-命の分水嶺』音楽特集①

インタビュー　サエキマサヒロ　「同時発音数1から生まれる豊穣」

ーまずは自己紹介を。

広島で活動している、エスニック系のマルチ弦楽器奏者です。態変との関わりは『ラ・パルティーダ』(1999年広島・2006年大阪)で演奏をおこなった。その縁で。今回の楽器は、アラブのウード、沖縄の三線、エレキギター、ノルウェーのセリエフルート、各種ドライバー・工具などを使います。

ーニライカナイという作品について、最初の印象は？

最初は、ニライカナイという言葉に呪縛されていたかな。素直に、ニライカナイというと沖縄よねーというような。沖縄らしいもの、その中で立ち現れてくる産土の神と、自分たちが生きている事のせめぎ合い、みたいなものかなあと思っていたんだけど、それは稽古でだいぶ外された。ここまで、抽象的なもので攻めてくるとは思わなかった。音も動きも。

両極端の世界観

ー稽古が始まってどんなイメージが出てきましたか？

演奏している時、あるシーンで心に抱いているイメージは、歯車がギクシャク動いていて、さびれた感じのビルがいっぱい立ってて、その下に女の子がいてなんか泣いているみたいな景色と、同時に辺野古がずっと心にある。あったかい海があって、でもそこには闘っている人がいて、同じように幸せに子どもを育てて暮らしてる人もいるんだな、とか。色んな違う局面をもつものを、なるべくとけこませて音にしている。

ーわざと汚い音を出しつつ、柔らかい三線を奏でるとか。

工具を弦にはさんだり、金属でギターをこすったりしてるんですけど。そういうのをやるときって、優しくやらないと恐いだけになっちゃう。「ギギギギー」というものと、「ふわーっ」というものが常に一緒にあって、どっちかがどっちかをバックアップしている。片方だけ、というのは採用出来ないというか、自分が自然とそうなっているというか。

ー両極端な世界が常に共存している、というところをみせたいのでしょうか。

そう思います。自分がやってきた音楽でも、ライブの後、「癒されました」といわれると傷付いたりする。癒しのためにやってるわけじゃない。世の中にはいろんな民族楽器やクラシック、パンクとか、素晴らしい音楽はいっぱいあって。そういうの、全部見た上で自分はやりたい。美しいものだけじゃなくて汚くてダーティなものも含めて。いろんなものを自分の中にとりいれて、とりいれてとりいれると、自然になんだか練り上げられていく。

人間のハートってそんなに広いものではないと思うんです。すぐに胸がいっぱいになっちゃったとかいうでしょう。すぐに頭にきたりすると、容量ちっちゃいなとか思うんだけど、そういう部分は、僕という人間はものすごく広いと思うんですよ。大阪の、この小さい部屋で話している自分の中には、北極から南極から、赤道全部回っているだけの音楽が全部ある。それが自分のなかで自由にこねこねされて出て来て、自分のものに変わって、音楽になることもある。

ーそのスケールの大きさというのは、デジタルとアコースティックなものを混ぜたい、宇宙観みたいなものを出したいという思いと重なりますか。

そう。地球にはいろんな場所があって、今のシリアのようなところもあれば、心のとろけそうな楽園もあるし。でもそこに住んでいるのはだいたい僕らが知っている範囲の「人間」とか、「命」とかで、「宇宙からきた悪魔」とかはあんまりいない。でも、いろんな場所があるの。ということは、いろんな場所を知るべき、というか知ってたほうがよいですよね。幸い僕はいろんなものを教えてもらったり導いてもらえる機会が多かったので、いろんなものがみえた。

ー広い、そういう世界の中のいろんな音をかき集めて、ここだけじゃないスケールの大きな世界を出したいという事？

そう。でもね、それは、同時にすごくスケールの小さい話でもある。すごいしょうもない、居酒屋の端で「くそ馬鹿やろー」てばやいているような感じも、現したい。自分がごくごくしょうもない、単なるしょうもないじいさんであることも、忘れたくない。

過剰なまでに豊穣

ー身体表現のパフォーマーを見ながら、生で音を出していくというプロセスは、どういうものなんですか。

テント芝居をやっていたときは、役者が3歩あると3歩目で演奏を始めてくれという指示があったりしたけど、態変の場合は、きっかけがすごくファジーで。演奏しながら、水の中をぼこぼこぼこ、とか土の中をがしゃがしゃがしゃ。とやっていると、あそこに下村さんが現れます、というような、すごくファジーなものをきっかけに、音を変えたりする。

でも演奏してて、演奏と動き方のシンクロ具合で一瞬のうちに完全な晴天になったり、どこまでも深く空いている地の底の穴になったり、ということを勝手に感じる瞬間がある。すごくファジーで、たどりつくまで何があるかわからないのに、ある一瞬でものすごくピシ、とわかる。それがあったときはすごく楽しい。：なかなかないですけどね。あってもその音が、(演出から)採用になるかは分からないのですけどね。

ー今回の作品について、おすすめするところを教えて下さい。

過剰じゃない、っていうところが過剰なのがすごくいい。今の音楽は飽和させることを目的にしていて。ドラムがはじまり、ベースがあり、さらに、それだけでもじゅうぶん飽和気味なのに、マニュピュレーターがいれてこれもあれもと、いっぱいあって。それが、今回は過剰なまでにナイ。SANgNAMはいくつも音が出せるけれど、テルミンなんて、同時発音数は1つだけ。今の世の中に、同時発音数1の楽器なんてあんまりないですよ。それがパフォーマーの身体と重なった時の豊穣さは凄いと思う。

僕の楽器も、三線もウードもほとんど同時発音数は1。出そうと思えば複数の音も出せるけれど、同時にひとつの音しか出さないという前提で音楽作っているような楽器だから、そういう意味で全然過剰じゃない。だけど、それがパフォーマンスと重なったとき、凄く豊かになっているし、ひとりひとりが出している動きは、過剰なまでに豊穣。それはなぜかというと、金さんが、すごく孤独で透徹なものを求めている気がして。それで俺たちを金さんが圧迫してくるようなところに、俺たちが「ええい！」と応えようとするようなことが、豊穣さを生んでいるんじゃないかな‥。

聞き手：H・T（『ニライカナイ』黒子）

『ニライカナイ -命の分水嶺』音楽特集②　ミュージシャンより

DJとして関わること
SANgNAM（DJ・selector）

昨年の夏の後半ごろだったと思う。突然、金満里さんから「慎、春公演の音楽なんやけど、協力してくれへん?」という声掛けを頂いた。僕自身は劇団態変の一ファンでしかないのでその声掛けにびっくりしたし今もビビりまくっている。

これまで作品を観てきて（僕の初めて観た作品は『一世一代福森慶之介　又、何処かで』です。）、直感的にだけど、パフォーマーの身体表現に対して無機質で無表情なグリッジ音やノイズ、不規則なリズムがあっても面白いかもと思っていた。そこで「dagshenma という子がいて、その子の作る音と態変のパフォーマンスをぶつけたら面白いかも。」と金さんに提案した。dagshenma は、グリッジ音、ノイズをはじめ、様々な音をサンプリングしたり制作し、その素材で難解なリズムや展開を構築する京都在住の電子音楽アーティスト。その音を是非使用したいと思い、彼に使用許可を頂き、僕がDJ・selector という形で音楽を担当する事になった。

これまで態変の作品には見られなかったような音になると思う。無機質で機械的で暴力的な音は時に陰湿で暗黒で無で絶望的な感じがするかもしれない。でも、その中には「陰」から這い上がるパワー、生命の力の様なものがあると思う。

舞台でDJをするなんて初めて。稽古中、緊張しすぎてドキドキしている。でもこの緊張感の中でパフォーマーの身体表現と音をぶつけ合っていると次第に気持ち高まりが胸が高鳴り、本番が楽しみでしかない自分がいる。

dagshenma(楽曲提供)

dagshenma（ダグシェンマ）とは京都市在住のhiguchi　eitaro による電子音楽プロジェクト。カオスの中にポップさを、精神世界の旅のお供になる作品作りを目指している。人間と非人間の掛け橋になる音楽を目指すプロジェクト。因に、dagshenma はチベット仏教用語で、自己と他者の交感、といった風合いの言葉である。

soundcloud: http://soundcloud.com/dagshenma
bandcanp: https://dagshenma.bandcamp.com/

『ニライカナイ -命の分水嶺』音楽特集②　ミュージシャンより

楽器に手を触れず演奏する
児嶋佐織（テルミン）

電子楽器テルミンを演奏します児嶋佐織です。このたびご縁あって劇団態変の舞台にはじめて関わらせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

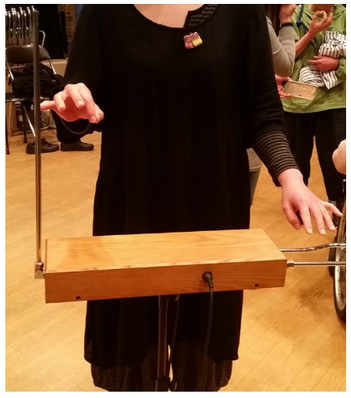
楽器に直接手を触れずに演奏する、ちょっと変わった楽器「テルミン」に出会ったのは、1998年の夏でした。神戸で行われたテルミンのコンサートに足を運ぶ機会があり、一聴して魅了され、2年くらいしてから自分でも楽器を手に入れ演奏を始めました。

なかなか目にする機会がない、と言われますが、実は世界でも特に日本はテルミンを楽しむ人がとても多く、大都市のカルチャーセンターにはいくつもテルミンの講座がありますし、わたしもレッスンを受け持っています。

「楽器に手を触れずに奏でる」ところがテルミンの魅力であり難しさでもありますが、身体の動きそのものが音楽になるという点は、他の楽器にはないパフォーマンス的な楽しみがあると感じています。

テルミンは、1920年にロシアの物理学者レフ・セルゲイヴィッチ・テルミンが発明した、世界最古の電子楽器です。

ティッシュの箱をふたまわりほど大きくしたような木の箱の左右両端から、金属のアンテナが生えている、という見た目はおよそ楽器に見えない・・・というか、何かの機械のコントローラーやラジオなどに近いルックスです。このアンテナに両手を近づけたり離したりすることで、音の大きさや高さを変化させて演奏します。演奏中は楽器にほとんど手を触れないので、演奏している、というより、踊っているように見えるかもしれません。



テルミンとは！？

もとは物理学者テルミン氏がロシア軍に従軍して無線機の開発をしているときに、ノイズのひどい無線機に手をかざして、ノイズの音の高さが変化することを応用して開発したものなのですが、1920年当時のロシアは、電気といえば「暗い所を明るく照らす」ことが主な用途だったので、その発明はたいへんな驚きをもって讃えられました。

テルミン氏の生涯については、さまざまな謎や興味深いエピソードがあり、伝記映画も制作されています。日本では2001年に公開され、ちょっとしたブームになりました。ご興味のある方はぜひ、ご覧になってください！

ニュース！

(2017.2.21)

劇団態変

社会デザイン賞「優秀賞」を受賞

社会デザイン学会が、これからの社会デザインを模索するために必要な「知」や「技」の形成に寄与する研究や実践者を表彰する「社会デザイン賞」。
このたび劇団態変が2016年度の優秀賞を受賞しました。応援してくださっている皆さまにぜひご報告したく、こちらに掲載させていただきます。これからも、先端を切り拓く態変でありたいと思います。（制作部）

劇団態変　賛助会員制度（2017年度）

次年度に向けて、新規会員／継続会員　へ
ご協力お願いいたします。

劇団態変は、2012年4月に賛助会員制度を設けました。行政からの補助金を受けず、身体障碍者である態変のパフォーマーが主体となり芸術創造活動を行っていくため、資金面でのご協力を市民の皆様にお願いする取り組みです。会員の皆様の力によって、様々な企画や稽古の場となるメタモルホールを維持し運営することができています。
現在、2017年度の賛助会員募集を開始しております。

年会費制です

個人会員　　年会費　一口5,000円
法人会員　　年会費　一口20,000円

会員特典があります

・会員証発行
・劇団態変 公演映像ＤＶＤ進呈
（毎年１回 当該年の公演ダイジェスト映像）

個人会員：
チケット料金５００円割引（何度でもご利用可能）
法人会員：一作品 １名ご招待

入会方法

①郵便振替
同封の振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。
・お名前　・ご住所　・お電話番号（任意）
・メールアドレス（任意）

②ＰａｙＰａｌ
メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方は
ホームページよりご利用頂けます。
劇団態変ＨＰ→日本語ＴＯＰ→「賛助会員制度」に
お入り下さい。

劇団態変の活動へのご支援を、
何卒よろしくお願いいたします。

出版物ご案内

情報誌イマージュ

劇団態変から編集・発行を続ける情報誌。
現代社会を鋭く切り取り語り合う、ディープな拠点となっています。
年3回お手元に届く定期購読もおすすめ！　公演会場でも販売しています。

最新号
Vol.67
2017年春
（発刊予定）

対談　石垣金星　×　金満里
「クバの木をつたって神が降りてくる
～西表島の神々と沖縄の未来と」

対談ゲストには、西表島の圧倒的な大自然の中で自らも農業を営み、文化人としても行動してこられた石垣金星さんをお迎えしました。五百年前から連綿と受け継がれてきた新年を祝う祭事「シチ」をはじめ、西表の知られざる魅力や沖縄の未来について語り合っています。
特集テーマは「沖縄（仮）」。公演『ニライカナイ』と合わせ、多角的に沖縄を感じていただける内容に。現在、鋭意編集中、ご期待ください！

情報誌イマージュ
バックナンバー

※ホームページにも詳細掲載しております。他では読めない話題満載。
１冊から購入いただけます。

VOL.63　2015年　秋号
特集　「大阪都構想」を止めた！
クロスオーバー談義● 内田樹×金満里
「ことばが身体に伝わるとき　からだが言葉を発するとき」

VOL.64　2016年　春号
特集　死生観について
クロスオーバー談義● 釈徹宗×金満里
「死生観を語る ～繋がりの再建のために」

VOL.65　2016年　夏号
特集　２０１６劇団態変東京プロジェクト
クロスオーバー談義●　田口ランディ×金満里
「無限に広がる地平に、ごろごろ転がって進む！」

VOL.66　2016年　秋号
特集　私たちの生きる場所
クロスオーバー談義●　中山千夏×金満里
「個人とコミュニティのはざまで　～既存の価値観を転換せよ」

〈情報誌イマージュ　ご購入は・・・〉
同封の郵便振替用紙に以下をご記入の上、お振込み下さい。
・振込人住所氏名
・送付ご希望の住所氏名　・電話番号
・メールアドレス（任意）　・物品名　・数量

1冊 500円

年間購読 1500円
（年3回・送料込）

1991年9月3日第三種郵便物承認　毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行

『ニライカナイ - 命の分水嶺』　作・演出・芸術監督　金満里

片方を肯定し、片方を消し去ろうとする。そんな窮屈で、誰にとっても逃げ出したくなるような社会とは一線を画する世界像を、沖縄の大自然が育んだ「ニライカナイ」という思想を元に探すことはできないか。本作は、この願いを原動力として、描かれることとなりました。

相反する明と暗、光と影、生と死、そのどちらをも共存させる自然の原理に、人間の命や営みも当たり前のように含んできたおおらかな思想。これを、都市に生きる我々の身体で表現し、掴んでみようと足掻く試みは、都市ならではの方法で、命の本質に向き合うための祭礼ともなる予感に満ちています。

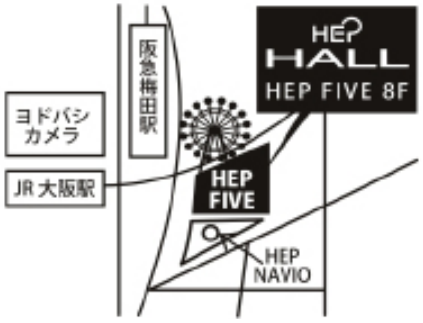
身体あることこそを祝福せんと、世に突きつける 渾身の舞台。
どうぞお見逃しなく！

劇団態変第64回公演

ニライカナイ
命の分水嶺

2017年
3月24日（金）19:30
3月25日（土）13:00★1 ／ 18:30★2
3月26日（日）13:00★3

受付は開演の1時間前、開場は30分前
★印の公演終演後は、金満里とゲストによるアフタートークを開催します
ゲスト★1 大黒党ミロ氏（漫画家）
★2 小堀純氏（編集者）
★3 わかぎゑふ氏（劇作家・演出家）



赤い観覧車のある「ヘップファイブ」のビル、
正面入り口のエレベーターで8階へ！
★阪急梅田駅から徒歩約3分
★JR大阪駅御堂筋口から徒歩約4分

会場　HEP HALL
大阪市北区角田町5-15 HEP FIVE 8F
06-6366-3636（11:00 ～ 18:00）

チケット（日時指定・当日受付順自由席）
前売　一般　3,500円
障碍者・介助者・シルバー（70歳以上）　3,000円
U-22（22歳以下）　2,000円
当日　4,000円

チケットご予約
①イープラス（一般チケットのみ販売・
コンビニ等で事前チケット受取りが可能です）
https://goo.gl/Y3eHbt

②劇団態変
TEL/FAX　06-6320-0344
E-mail　taihen.japan@gmail.com
HP　http://www.ne.jp/asahi/imaju/taihen/

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町2－2　東興ビル4F
編集人（返送先）：イマージュ　和田佳子　小泉ゆうすけ　金満里　仙城真　　表紙イラスト：小林加世子
〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15
tel/fax 06-6320-0344　　e-mail taihen.japan@gmail.com　　定価50円